

# 金比羅・<sup>ゆか</sup>瑜伽大権現への 往来で賑わった石桁橋

# しゅうてんばし 秀天橋



『備前<sup>ゆか</sup>瑜伽山古絵図集』の解説文に「倉敷市児島由加山にある瑜伽大権現はその昔商売繁盛の神さまとして五穀豊穰、海上安全の讃州金毘羅大権現と並び称された巨利である。この両権現は両方詣ってはじめておかげがもらえるという俗信のもとに片詣りは忌まれ共々に繁栄した。」とあるように、岡山城下から両参りの道は各地からありました。その中の一つに児島湾を船で渡る往来がありました。岡山京橋辺りから旭川を下り、沖新田の三幡湊に寄港後、1km対岸の飽浦に渡り北浦・郡湊を経て八浜湊に到着するルートでした。

八浜湊から鴨川を上流に向かうと、「右ゆか道」「左下津井」の道標が石橋の東詰に立っています。この石橋が「秀天橋」で、元は渡船場があったといわれていますが、文化10年(1813)ごろ記された『手鑑 児島郡』の用吉村の項に「橋三つ〈二つ土 一つ石〉用吉・槌ヶ原両村構」とあるので、19世紀初頭には石橋が架かっていたようです。施主は滝村の商人、あるいは槌ヶ原村在住の大庄屋が架けたとか、諸説あるようです。

秀天橋は瀬戸内地方に多く産出される花崗岩を利用した桁橋で、全長36m、幅約3m、橋脚は1カ所3本ずつ8カ所で計24本あります。その橋脚間に長さ約4m、幅約50cm、厚さ約30cmの板石6本が1セットで9セット、計54枚が桁を形成しています。橋脚の下はくつ石とし、上手は半円形に巻石がしてあります。また、橋の下手に2本の穴のあいた柱石を橋より50cm程低く建てているのは、秀天港の船着場としての遺構ではないかと考えられています。

この石橋の架橋の経緯については不明ですが、左岸側第一橋脚の上部のほぞ穴が合致せず、当該区間の石桁に再建の跡があることから、左岸側の一連が災害等により崩壊、再建されたようです。

昭和56年に床版上部がコンクリート舗装され、それまでなかった高欄が設置されましたが、本橋が岡山藩領内における最長の石橋であるだけでなく、現存する石桁橋では全国的にも最大級の石桁橋であるのは違いなく、当時の土木技術を明らかにする上で貴重な土木遺産ではないでしょうか。

## 位置図



秀天橋の橋桁と橋脚



「左下津井下」とある秀天橋袂の道標



岡山県指定重要文化財 建造物「秀天橋」



新秀天橋